

Where there is no Vision, the people perish

北九州信徒聖書学校

2014年9月

第124号

月刊

על-פלוי מים

流れのほとり

連絡先 〒807-8691 北九州市八幡南郵便局私書箱 26 号 本部 TEL&FAX 093(692)8592

所在地 〒807-0004 北九州市小倉北区鍛冶町 2-3-13 北九州 YMCA 内

HP <http://bible-school.name/>

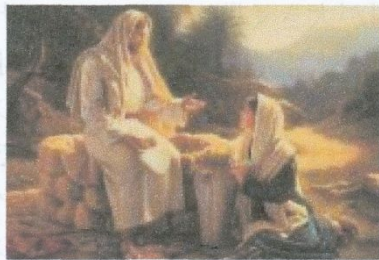
E-Mail hope_to_tomorrow.y@san.bbq.jp

宣べ伝える人がいなくて

仁川桂川中央メソジスト教会

元老 崔 世雄牧師

スカルという町にあったヤコブの井戸で
のことである。一人の女が水を汲みにやっ
てきた。イエスは、その女に「わたしに水
を飲ませてください。」と、声をかけられた。
すると女は、「あなたはユダヤ人なのに、ど
うしてサマリヤの女の私に、飲み水をお求
めになるのですか。」と、聞き返した。当時、
ユダヤ人とサマリヤ人は声もかけ合わない
ほどに憎しみ合っていた。イエスにとって、
すべての人が救われるべき尊い存在であっ
たので、彼女もその一人であった。この女、
イエスと話すうちに、自分が待ち望んだメ
シアと確信し、自分の町に急いで帰り、多



ヤコブの井戸

くの人をイエスのところに連れて来る役割
を担った。女は過去に5回も結婚し、今も
内縁関係にある男と生活していた。周りか
ら墮落した女と蔑視されていた。イエスは、
その女に伝道した。そのことにより、驚く
ようなリバイバルがサマリヤ地方全体にも
たらされる結果になったのである。

伝道の幻

イエスは、女を見た瞬間に彼女の霊的渇
きに気づき、「伝道の機が熟している」と分
かった。対話に応じようとせず拒絶してい
るように見えたが、内心では誰かの助けを
待っていた。イエスは、その女の心に伝道
の幻を見られたのである。知らないところ
で、私たちの伝道を心待ちにしている人々
が多くいることに気づかなければならない。

ある時、私は近隣の教会から伝道集会の
講師を依頼された。その集会にホンさんと
いう一人の青年が信仰の決心をした。かつ
て教会に通っていたが、教会から離れてい
た人だ。集会で心が責められ信仰を回復し、
伝道の熱情も与えられ、熱心に伝道するク
リスマンに変えられた。その彼が証しを
してくれた。

ある日、ホンさんはソウル南山公園に行

った。地方から出てきたと見える初老の男性がベンチにうずくまっていた。その人を見た瞬間、突然聖霊の声が聞こえた。「あの人に福音を伝えなさい。」「あの老人は、あなたの伝道を待っている。」聖霊の声に従うしかないと言悟を固め、その人に近づいた。「少しだけお話してよろしいですか?」と、恐る恐る話しかけた。「いったい、何の話だ?」。その老人は驚き聞き返してきた。「おじいさん、イエス・キリストを信じますか?」思いきって尋ねてみた。「そんなもの知らない。」「教会に行かれたことはありますか?」と、聞くと、おじいさんは「教会と俺と何の関係がある。」と、怒ったように答えた。「おじいさん。神さまはおじいさんをどれほど愛して、祝福しておられるか知っていますか。」と、彼はくい下がった。「そんな話は、俺には関係ない。」

しばらく話を交わしていると、突然、老人の目に光るものが浮んだ。「ああー、心が開かれた。」彼はうれしくなり、さらに力を込めて福音を語り続けた。「おじいさん、ぜひイエス・キリストを信じて欲しいのです。」と、はっきり言う。思いがけない言葉が返ってきた。「うん。若い人よ。私はイエスを信じるよ。」「おじいさんありがとうございます。」挨拶してその場を去ろうとした。

すると、その老人が彼の手を握って、「もし時間があるなら、私の話を聞いてもらえないか。」と、話し始めた。彼は、慶尚道サンジュに住む人だった。息子はベトナム戦争で戦死し、その後、妻と二人で暮らしていた。妻もしばらくして死に、一人になってしまった。「息子も妻もいなくなった。自分ひとり生きるために、必死に働いて、いったい何の意味があるというのか・・・。」そんな気持ちを抱え、有り金をポケットにねじ込んでソウルまでやってきた。目的もなくソウルで何日か過ごし、彼は決心した。

「もう、この世に何の未練もない。いっそうのこと、このまま死んでしまおう・・・。」薬局で大量の薬を買い、死に場所を求めてたどり着いたのが南山公園であった。ふと目にとまったベンチに座り込んだ。死んだ妻と息子を懐かしみ、「これで、私の人生はおしまいになる。」ポケットに薬に手を伸ばした瞬間だった。

「少しだけお話してもいいですか。」突然声が聞こえてきた・・・。ホンさんは、心が凍る思いだった。「声をかけるのをやめていたなら、いったいどうなっていたのだろう・・・。」老人はポケットから音をたてながら薬を取り出して見せてくれた。「もし声をかけてくれなかったら、私はこの薬を飲んで死ぬところだった。あんたが言うイエスは、私と何の関係がないと思っていた。話を聞いているうちに、ひょっとしたら私のような人間のためにあるのかもしれない。帰って教会に行って、あんたから聞いたイエス・キリストとやらを信じることにするよ。」ホンさんは薬の入った袋を受け取ると、ソウル駅までその人と行き、故郷に向かう電車に乗せて見送った。

私たちの周りには、イエス・キリストを必要とする人が想像以上に多くいる。助けを求める彼らの叫びを聞かなければならない。私たちクリスチャンと教会は、神が見せて下さる伝道の幻を見なければならぬ。

伝道の壁

イエスがサマリヤの女と会話したことで、伝道の門が大きく開かれて行く。サマリヤ人とユダヤ人の間には歴史的な敵対感情の壁があった。ユダヤ人社会の男女の壁は厳格で、ラビは自分の妻とも家の外では会話を交わさなかった。ましてサマリヤの女は蔑視された存在であった。これらの条件が伝道の壁としてイエスの間に立ちはだかつ

ていた。しかし、イエスは伝道を放棄されず女に親しく語りかけ信仰告白まで導かれた。

私の家にも難しい伝道の壁があった。3代にわたる熱心な仏教の家柄、毎朝大人たちは正座し数珠を持ち念仏を唱えていた。父は、仁川で学校の校長や理事長の職にあり、名誉も富もそれなりにもっていた人であった。1945年、朝鮮戦争を経る中で、父は事業を起こした。不慣れで経験もなく、やることはすべてが失敗し家は貧しくなり、家運は傾き食べるのも事欠いてしまった。たった一つの最後の望みは、私が政治家に医者になってお金を儲け傾いた家運を再興することであった。

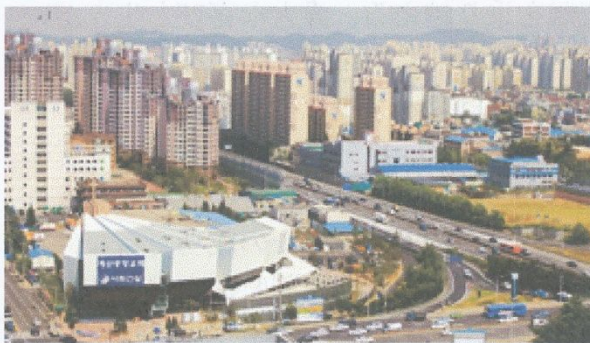
そのような中、私は友人の伝道によって高校2年生の時に初めて教会に行き、高校3年生になり、イエス・キリストの十字架のメッセージを聞くうちに、聖霊に捉えられて心から悔い改めて新生を経験した。十字架の贖（あがな）いの恵みに応えるために献金を捧げたと思ったが、お金がなく着ていた服を脱いで献金袋に入れた。泣きながら感謝の祈りを捧げたのを覚えている。祈りの内に、「お前自身を捧げなさい。」との主のみ声を聞き、十字架の恵みに応えるために生涯を捧げ、牧師となる決心をした。その日は朝まで泣きあかし、讃美し続けた。

当時の牧師と言えば、貧しさの代名詞のよう存在だった。私が牧師になるということは、家の再興を願う両親を崖っぷちから突き落とすことを意味した。しかし、勇気を出して両親に告白した。父は顔が硬直し、全身の血が止まったように見えた。母はすべてを放棄し失望した。父は怒りをぶちまけ、「家を出て行け!」と、私に命じた。1956年、私はソウルにあった監理教神学大学に入学した。1年生はなんとか終えたが授業料を払えず、次の1年を休学。1年後やっ

との思いで学費を準備して、9月に複学した。後輩たちと机を並べて学んだ。

神学校を卒業して、牧師となり小さな島の席毛監理教会に赴任した。牧師という使命感だけを胸に、貧しさや孤独と闘いながら教会の働きを続けた。そんなある日、実家から電報が届いた。54歳の父が、転んでけがをしたという知らせだった。帰る旅費を準備するのがやっとなで、治療費の足しに渡すお金までではなかった。父は意識を失ったまま横になっていた。私は、ただ黙って父を見つめた。あれほど期待されていた息子だというのに、家族のために何の力にもなれず、黙って座り、冷たい父の手を握って祈るしかなかった。「神さま。生きるも死ぬるも、すべてあなたの御手の内にあります。このまま召されるなら、信仰のない父は天国に行くことはできません。どうぞイエスさまを信じ、救いに預らせて下さい。」短い祈りだったが、父のために祈る、最後の祈りのつもりだった。父は聖母病院に入院した。意識をなくしたまま1ヶ月が過ぎようとしたある日、奇跡が起き父の意識が回復した。

その後、元気を回復し信仰も与えられ、74歳まで過ごすことができた。母も信仰が与えられ、両親ともに信仰生活を全うした。私の兄弟もみな救われた。私の家族からは、7名の牧師が誕生した。どの家にも伝道の壁が存在する。しかし、神さまにとって不



仁川桂山中央メソジスト教会

可能はない。聖霊は門をこじ開け、どんな強固な壁をも壊すことができるお方なのだ。

伝道は隣人愛

私たちの教会で、総力伝道と銘打って全教会員で外へ出かけ、個人伝道を行ったことがある。すると、一人の教会員が道路の四つ角にポツンと立っているのが見えた。近づいて、「どうして伝道しないで、立っているのですか？」と聞くと、その教会員は確信に満ちた口調で答えた。「先生、手当たり次第に伝道してもだめです。しっかり見張って、信じてくれそうな人に伝道しようと思っているのです。」彼は、信じてくれそうな人が現れるのを待ち続けた。事業家は、正確に利害関係を計算して事業を起こす。実行するも、放棄するもその人の自由だ。私たちが、慎重に結果を予測し検討することは正しい態度だといえる。しかし、伝道は、人間の知恵や知識や経験で判断してはならない。伝道は、神さまを信じて行うわざである。

1980年、私たちの教会は伝道の門が大きく開かれた。教会内は伝道の機運が高まり、伝道の働きが強力に展開された。その年だけで1,053名の新しい教会員が誕生した。伝道が難しく困難だとしたら、どうして福音がサマリヤを経てローマ、ついには地の果てにまでもたらされたのだろう。伝道には多くの苦難が伴うことは事実だが、その苦難を乗り越える、偉大な喜びと生きがいが私たちの前に備えられている。

人生のほんとうの成功とは何か。ほんとうの成功とは、自分一人だけの成功を意味しない。同時に神にとっての成功でなければならず、隣人にとっての成功でもなければならぬ。この三つを同時に実現させる道が、まさに伝道なのである。地を掘って「信仰」を隠しておけば、いつの間にか錆つき

やがて価値を失う。信仰をもって、祈りながら喜びをもって仕え、伝道する生活は、実り豊かな人生に私たちを導く。伝道は神さまの御心を実現するのである。

(「残りの民」崔 世雄著 抜粋)

第9回 ピスガ聖会

主題 「伝道は隣人への愛である」

聖書 「宣べ伝える人がいなくて、どうして聞くことができるでしょう」

(ローマ10:9~14)

講師 韓国仁川桂山中央メソジスト教会

Gyesan Centoral Methodist Church

(会員7000人)

元老 崔 世雄 牧師

(韓国メソジスト教団監督、ジョン・ウエスレー伝道学校設立及び初代理事長、メソジスト神学大学財団理事長、韓日伝道の種子作り宣教会韓国総裁、日本福音宣教会 Japan Evangelikal Mission 代表。2007、2009、2012年本校聖会に来校。)

聖会

日時 2014年10月10日(金)

午後7時~9時

会場 財団法人 北九州YMCA

(北九州市小倉北区鍛冶町2-3-9)

聖日礼拝

日時 2014年10月12日(日)

午前10時30分~12時

会場 日本イエス・キリスト教団

小倉教会長行チャペル

(北九州市小倉南区長行西5-4-16)

編集後記

本校の使命と働きに寄せられます日頃のご加禱ご支援に深い感謝を申し上げます。